

るゆるされもなかりけるにや、頼朝も手にあまりたる事かなどもや思ひけん、是等は去れる人もなきさかひの事也、さて帝の外祖にて、能圓法印現存して在しかば、人もいかにと思ひたりし程に、ほどもなく病て死にき、よき事と世の人思へりけり。

〔増鏡三四神也〕はかなくあけくれて、仁治二年にも成にけり、御門四はこと去十一にて、正月五日

御げんぶくし給ふ、御いみな秀仁ときこゆ、そのどしの十二月にとうるんこ攝政殿のの姫君

九になり給ふを、おほぢの大殿道家藤原御をぢの殿原なごむたちて、いとよそほしくあらまほし

きさまにひいききて、女御まゐり給へば、父の殿ひとりこそ物し給はねぞ、大かたのぎしき、よろづ

あかぬ事なくめでたし、うへもきびはなる御ほごに、女御もまだかくちひさうおはすれば、ひい

なあそびのやうにぞ見えさせ給ひける、天の下はさながら大殿の御こゝろのまゝなれば、いと

ゆゝしくなん。

〔五代帝王物語〕今は院河もわたらせ給はず、主上四も幼稚におはしませば、外祖にて大殿藤原

家原道世を行ひ給ふ、將軍頼經卿は御子なれば、武家にもかたゝゝ因縁あり、前相國公經公後院の

別當なるうへ、大殿のまうとにて、これも關白一體の人なれば、二人申合て行はれけり、大殿は帝

の外祖たるうへ、攝政并征夷將軍の父なれば、世の従ひ恐事、吹風の草木をなびかすよりも速な

り、されば山の座主、三井寺の長吏、興福寺の別當、みな御子也、仁和寺の御室は、代々王胤にてこそ

おはしませども、世を手に握り給うへは、北の政所の腹に、福王御前とて愛子にて御坐をば、御室

の弟子に成て、師跡をうけつぎ給き、されば大殿の御葬禮の時も、殿たちよりも上にたちておは

しませしけるは、父の御素意のどほりなるべし、後は關白の准后法助と申、法師の准三后の宣旨是が

始なるべし、かくて大殿は世を治て目出おはしますほごに、文曆二年嘉禎元三月廿八日に攝政道

家子實廿六にて俄にうせ給ふ、言ばかりなき事なりしを、やがて大殿又成かへり給ぬ、故攝政をば